キラッと生きる

「素敵な絵本との出会いを提供し続けて 44 年」

絵本専門店「ゆめや」店主　**長谷川敏夫さん**

1947 年生まれ
人生を変えた本ミヒャエル・エンデ「モモ」

武田神社、相川小学校の近くの閑静な住宅街にある絵本専門店の「ゆめや」さん。目立つ看板もなく、通りすがりの人は、ほとんど見過ごしてしまいそうな一軒家風の店構えです。「知る人ぞ知る絵本のお店」「一見さんお断りの会員制」などの噂を聞いていたので、敷居が高そうと身構えましたが、扉横の出窓には、時節に合わせた可愛らしいディスプレイや絵本が見開きで置かれ、店主の長谷川さんも優しい笑顔で迎えてくれました。

「ゆめや」のストーリーの始まり

長谷川さんが大学卒業後。就職したのは東京の新聞社と出版社。父の病死で山梨に戻り１９８０年３月３日に甲府市相生で「絵本専門店ゆめや」を開店しました。その年はニンテンドーのファミコンが出たタイミング、背後には子どもの情緒の発達を阻害しかねないサブカルチャー（テレビ、アニメ、キャラクター絵本、ゲーム）が台頭していて、それに抵抗する気持ちもあったといいます。

書店を安定経営するためには、教科書販売や図書館に本を収めていなければ厳しいのだそうです。「ただ、うちは最初から、その利権を持ちませんでした。電話一本で一括受注ではなく、一人ひとりのお客さんと対話しながら本を売りたかった。でも人口の少ない甲府市で絵本専門店を経営するのは難しい。そこで、地域に限定しない方法を模索し、個別の月齢別選書を定期的に配本していくシステム『ブッククラブ』を作りました」という長谷川さん。発想の転換が現在の「ゆめや」を作りました。

画期的な配本システムができるまで

最初は８人からスタート。口コミでどんどん広がっていき、1988 年には会員数が 600 人を超え、一時期は 1000 人を上回ることもあったとか。勧誘方法は全て顧客からの紹介による方に限定。しかも、2 歳以上の子は原則として入会できないというこだわりのシステムであるのにも関わらず、会員はほとんどが県外の方、海外に住む会員さんも多いというのに驚きです。「転勤族の方は、引っ越し先でアンテナを張って良い品を探すから、うちのような店を見つけてくれます。そしてまた転勤先で紹介してくれるから、自ずと県外にお客さんが増えるんです」

1987 年には県外の会員が 70％を超え、夫婦二人の作業では事務や配送業務が賄いきれず、入会希望者は来店可能な方と会員の紹介という条件に絞りました。やがて、バブル景気で効率と大量消費の時代に突入。街並みも大きく変化した 1994 年、相生から現在の屋形３丁目に移転しました。

開店当初の「ゆめや」
現在のかすがモール南

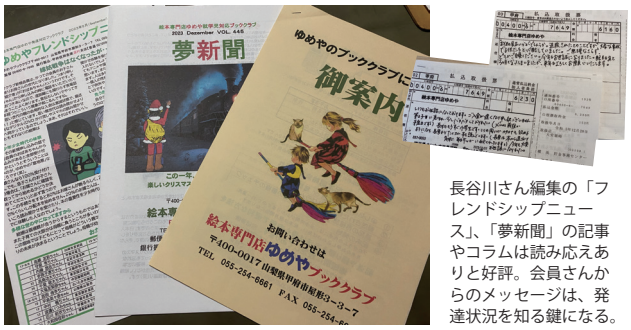
長谷川さんは大学時代、歴史や民族学を学びました。「トインビーの文化形態学では、哲学、高等宗教、戦闘体という三つの条件を満たした文明のみが正常な国家に成長すると考えます。人に当てはめると自分独自の方法論をもつ、他への影響力の大きい高度な人格、それらを表現するための体力を持つことが健全であると。これらは学校教育だけでは養われま

せん」だからこそ物心ついた時から本を読み、考える力を養うことが必要。その子の発達段階に応じた形で選ぶことが基本であるということ。結果、入会できるのはサブカルに影響をうけてない時期、10ヶ月から2歳までと限定したのだとか。「発達年齢対応ブッククラブ」とその上に「就学児対応ブッククラブ」があり、子どもの発達・成長に応じたガイドラインを基準とし個別に配本されます。

例えば長谷川さんは、2歳児にはエッツの「もりのなか」を薦めます。主人公の男の子が森の中を散歩して次々といろんな動物に出会っていく単純なストーリー。モノクロの絵本だから子どもは想像力を発揮します。3歳児になると少し展開が大きくなり緩やかなオチなら理解できるようになる。4歳になるとオチがあるものを面白がり、社会性も入ってくる。発達に応じて分けられ、さらに生活環境や第1子か第2子以降かでも違ってくるのだそうです。

良書は時間が経っても廃れない

好きな絵本作家を尋ねると「たくさんいるけど特に谷川俊太郎と安野光雅が好きです」との答え。「谷川さんの『もこもこもこ』は、全ての本の始まりと言ってもいい。ものが生まれて変化して無くなっていくことをあらわしています。一歳半ごろに読み聞かせるのがタイムリーです。翻訳本では、レオ・レオニの『あいうえおの き』がおすすめ。擬人化された文字が 手をつないで言葉を作るストーリー。文を表現することの目的が、行動するための基本作業であると教えてくれる絵本です」。



長谷川さん編集の「フレンドシップニュース」、「夢新聞」の記事やコラムは読み応えありと好評。会員さんからのメッセージは、発達状況を知る鍵になる。

開店以来、44年間続けての成果、やり甲斐は「2歳で入会し高校生になっても、ずっと続けている子がいます。そういう子たちが大人になってどうなっていくか楽しみです。それからかつてのブッククラブのお母さんがおばあちゃんになって孫への配本も増えていますので続けてきた甲斐を感じます」と長谷川さんは目を細めて答えてくれました。

そんな長谷川さんも絵本の将来が今後どうなるか憂いています。「デジタル化が進み益々、本が売れない時代になりました。全国の図書館に一冊配本するとして、出版社は1500冊程度刷ったら次の新しい本を刷らなければ立ち行かない。流行ありきでヴィジュアル重視の絵本は残りません。良書でも売れなければ絶版になってしまう。優れた新人の発掘も難しい」と厳しい環境のなかで、どうやって読み聞かせや読書を存続するか模索中だとか。

これからも子どもたちに絵本を届けたい

「ゆめや」の今後について尋ねると「私一代で終わりです。後継者には、この採算性のなさでは引き継げません。私は意地でやってますが」とちょっとシニカルに笑う今年77歳になる長谷川さん。かつてのジャーナリスト魂は健在で、奥の書架には環境や反原発に関する社会派の本も並びます。まだまだ現役を貫いて、子どもたちに素晴らしい絵本を選んで思考の種を絶やさないようにお願いしたいです。

絵本専門店ゆめやブッククラブ

住所　〒400-0017 山梨県甲府市屋形 3-3-7
TEL　055-254-6661　FAX: 055-254-6660
URL　https://www.yumeya-bookclub.jp

取材：編集委員　松浦 馨　植田礼子　山中みゆき（文）